

ヒトラーに嫌われた画家  
— ノルデとヌスバウム —

**Maler, die sich bei Hitler unbeliebt machten**  
— Nolde und Nussbaum —

漆谷 克秀  
**Katsuhide Urushidani**

1.

エミール・ノルデEmil Nolde(1867～1956)については、表現主義の画家として以前から知っていた。

フェリックス・ヌスバウムFelix Nussbaum (1905～1944)を初めて知ったのは、『芸術新潮』1992年9月号で「ナチスが捺した退廃芸術の烙印」という特集においてであった。「ダビデの星」が縫い付けられてあるコートの際をたて、ユダヤ人証明書を見せて、前方を見据える自画像である。1943年に描かれたこの絵に「潜伏生活の中で自らのアイデンティティーを見据えた悲痛な作品《ユダヤ人証明書を持った自画像》」Selbstbildnis mit Judenpaßというコメントが記されている。しかし、当初、わたしは、他の作品を知らなかったこともあるのだが、不敵にさえ思える笑みを浮かべているその眼差しに、ナチスへの抵抗を決意している堅固な意志を見ていた。背後に描かれてある壁、また壁の後ろで先端だけが見えている木々、このようなモチーフの配置は、ヌスバウムの他の作品にも見られるものである。しかし、この絵では、その壁は高く、その背後にありそうな空間を暗示しながらも、逃げ出せない行き止まりを示しているように思えてくる。不敵な笑みのように感じられても、もう自分ではどうにもできない呪いにも似た真逆の笑みで、悲痛な想いを秘めているのであろう。

この夏(2015年)、沖縄国際大学の特別研究費をいただいて、ドイツに行った。国外研修で、1986年4月から一年滞在したミュンヘンMünchenと、1999年4月からやはり一年間滞在したシュトゥットガルトStuttgart近郊のマルバハMarbach am Neckarに行った。ヨーロッパに行く最後の機会になるかも知れないこの旅行で、是非行ってみたいところが二カ所あった。ひとつは、ドイツの北の端、デンマークとの国境のすぐ近くの村、ゼービュルSeebüllにあるノルデの美術館で、もうひとつは、ハンブルクHamburgからインターシティーで1時間半ほど南西に行ったオスナブリュックOsnabrückにあるヌスバウム美術館である。オスナブリュックはまた、『西部戦線異状なし』Im Westen Nichts Neuesの作者であるエーリヒ・マリア・レマルクErich Maria Remarqueの生誕地でもあり、旧市街の市役所のすぐそばに、レマルクの資料展示のための広いスペースを持つ建物がある。オスナブリュックの都市名には、„Die Frieden Stadt“(平和都市)というロゴがついている。

さて、出自も世代も異なるこの二人の画家に、共通点がある。それは、二人とも郷土を愛したドイツ人である、ということ。そして、ヒトラーに嫌われた画家であったということである。

昨年(2014年)の12月27日、28日に宜野座村のガラマンホールで開催されたプロジェクト『コラージュ1914-1918, 第一次世界大戦犠牲者へのレクイエム「二度と戦争をしてはならない」』のプログラムにヌスバウムの「死の勝利」Triumph des Todes(1944)が取りあげられていた。この絵は、第一次世界大戦から生まれた絵ではない。崩壊した人間の生活の営みの残骸の上で、骸骨に一枚だけ皮膚が張り付いているような死神が、楽しそうに音楽を奏でて踊っ

ている絵である。ヌスバウムの最後の絵であるらしい。もしかしたら、このパンフレットが沖縄でヌスバウムのことを紹介した最初の一文ではないか、と推測している。

わたしは、いつも気になっていたこの二人の画家について、研究ノートとして思うところを書きとめておきたい。今年(2015年9月)、初めて実物を見たということであって、ここで対象とする作品について、これまで美術冊子やカタログ、美術関係の書物で見えていたということを書いておく。そして、この研究ノートは、この二人の画家へのわたしの主観的な想いがその中核になっている。

## II. エミール・ノルデ(1867～1956)

ノルデは、1867年8月7日に、ドイツ＝デンマーク国境のトーデルンTodernの近くのノルデ村に生まれる。名前はハンス・エミール・ハンゼンHans Emil Hansenであった。1902年2月に結婚したとき、家族名のHansenを生まれた村の名前ノルデNoldeに変えている。この改名は、ノルデの強い郷土愛を示している。自己の芸術が郷土に根差し、その精神性はこの郷土によって育まれたことを、彼自身が確信しているのである。

1937年にミュンヘンで開催された「退廃芸術展」Ausstellung „Entartete Kunst“は、五ヶ月で200万人の入場者を記録した。入場無料であり、当時のヨーロッパの最高のモダンアートを楽しめる展覧会であった。

会場内を撮影した写真に、ノルデの9点組の作品「キリストの生涯」が展示されていて、その前を多くの見学者が行き来しているものがある。それ以外に、宗教画「最後の晩餐」や、ニューギニア旅行の経験を描いた「仮面V」などが展示されている。この芸術展に、ノルデの作品33点が展示され、「キリストの生涯」が中傷誹謗の中心対象となっていた。一作家の作品数としてはノルデの作品が最も多かったのである。

ノルデは、1913年の夏から14年かけて、「医学-人口統計学ドイツ-ニューギニア学術調査団」Medizinisch-demographische Deutsch-Neuguinea-Expeditionの一員として、シベリア鉄道で満州、朝鮮を経由して日本に来ている。日本から中国、フィリピンなどを經由してニューギニアへ、またヨーロッパへの帰途には船を使っている。日本の能面のようなものを描いており、「仮面」を通して極東の国々にエキソチズムを感じていたのであろう。これらの絵画の制作年からすると、仮面は持ち帰ったもので、ニューギニアなどの南洋の工芸品とともに、能面がノルデのコレクションの中にある。

「退廃芸術展」のパンフレットにナチスがくださった「退廃の理由」が解説されている。『芸術新潮』の1992年9月号の特集では、ヒトラー自身が判決を下したかのような形でそれが表現されている。根底にあるのは、ドイツが民族的に優秀であることが示され、それが美しく具象的に描かれていなければならない、ということである。

ノルデの「キリストの生涯」に付された退廃の罪とは、「このわけのわからぬキリストの姿を見よ！ まったく侮辱的だ！ 敬虔なる信仰の心の持ち主が、このような恥知らずな暴挙に耐えられるものだろうか？」である。また、プリミティヴィズム(原始主義)の影響を受け

た他の作品も合わせてであるが、ニューギニアの「仮面V」について「未開の異民族がまるで理想的人間のようではないか!? われわれゲルマン民族の優越性に挑戦する不逞の輩を根絶せよ!」とある。ノルデは熱心なナチス党员であった。1934年には、ヒトラーへの忠誠に署名をしている。二つに海に挟まれた北ドイツの国土をこよなく愛し、自己の芸術がこの郷土に深く根差していることを確信している。この郷土は、市民社会の都市生活とは隔絶したドイツの辺境の地であり、この土地の自然と生活の営みとも結びついた神話的な、幻想的な、そして少し憂鬱なゲルマンの純粋な精神性をノルデの内に刻みつけていた。そしてノルデは、画家としての名声を獲得し、自らを「最も北方の画家」と位置づけ、ナチスの勃興とともに、新たなドイツの絵画が誕生することに期待を寄せていたのではないだろうか。

1937年には、ドイツ全国的美術館などから1102点ものノルデの作品が押収されている。また、制作の禁止、画材の購入も禁止された。ノルデは、当局に気付かれないよう、臭いのでない水彩絵具による制作を続けた。そのことで、幻想的な海や風景の絵、美しい多くの花の水彩画が生み出されることにもなった。

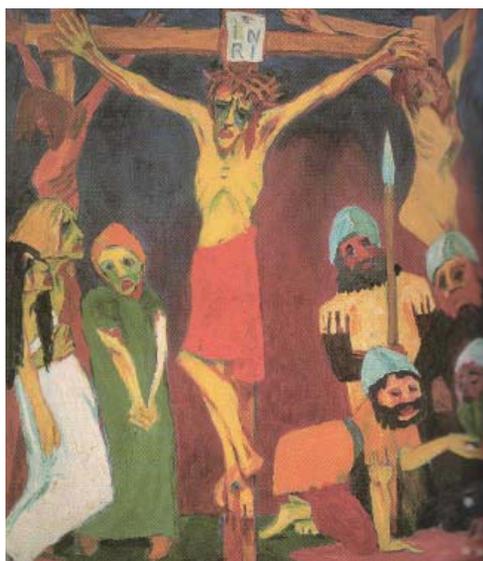


図1 キリスト磔刑  
200×193.5cm

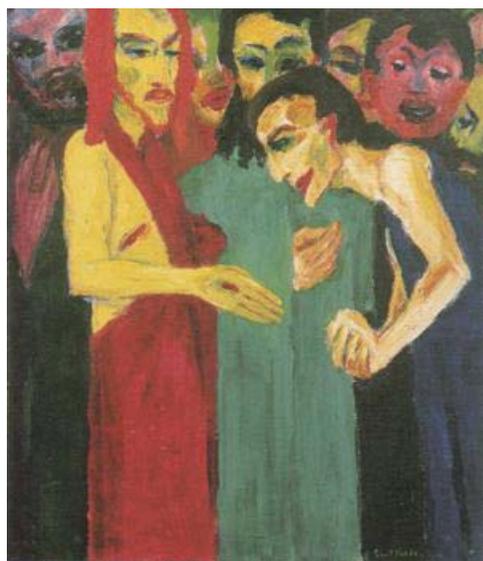


図2 聖トマスの不信  
100×86cm

この研究ノートで取りあげたいノルデの作品は、「キリストの生涯」Das Leben Christi(1911～12)と「失樂園」Verlorenes Paradies(1921)である。どちらも聖書から導かれた宗教画であり、同様のモチーフを扱った芸術作品は数え切れないほど存在している。また、聖書は、農夫の息子であったノルデにとって、日々の生活の中で幼い頃から親しんできた書物である。

9点組の「キリストの生涯」は、1911～12年に、画像の配置からして、おそらく祭壇画として制作されたと考えられる。中央の『磔刑』Die Kreuzigung Christi(図1)が大きく、左右のそれぞれの4点の絵に相当する大きさである。ニューギニアに行く以前ではあるが、ノルデは既に、プリミティヴィズムの影響を受けていると考えられる。けばけばしく着色され

たキリスト像に、ヒトラーは悪魔を見たのかも知れない。多くの祭壇画では、その中央に「キリスト磔刑」の図像がくる。わたしはいままで、そのような祭壇画を数多く見てきた。中世後期、特に15世紀以降に描かれた祭壇画の血生臭さに辟易することもあった。贖罪の姿がこれか、と嫌気がさして祭壇の前を通り過ぎることも多い。別に辟易したわけではないが、血生臭さにおいては、グリュネヴァルドMathias Grünewaldが描いたコルマルColmarにあるウンターリンデン美術館Musée d'Unterlindenの「イーゼン・ハイム祭壇画」le Retalbe d'Issenheimがその極みであろう。

わたしがノルデの「キリストの生涯」を、特に「磔刑」を、なにかの冊子か書物で見たとき、安らぐものを感じた。けばけばしい色彩に「侮辱的だ」と怒号を浴びせたい気持ちもわかるが、わたしは異教徒である。しかし、ノルデのにとっては、自己の信仰の証として、この図像を選び取り、この色彩でもって創作したのであり、この色彩以外にはなかったのである。

『磔刑』を見てすぐに気付くのは、イエスの右脇腹に槍で突かれた傷が描かれていないということである。しかし、9点目の『聖トマスの不信』(図2) Die Ungläubigkeit von St. Thomasという絵では、イエスの復活を信じなかった12使徒の一人聖トマスに、イエスは、磔刑の時に釘を打ち込まれた手を見せている。そのイエスの脇腹には、槍で突かれた傷が示されている。『磔刑』で描き忘れたというわけではないであろう。わたしはむしろ、その傷が描かれていないことに、動揺しながらも安らぎを得たのである。

『磔刑』のイエスの図像を見てみよう。体は全体に黄色で描かれている。十字架に固定するため釘が打ち込まれた手と足から赤い血が流れている。腰布も赤い。髪も赤毛といえよう。そして、顔の情動や体の形姿を表現するために緑が使われている。黄、赤、緑は原色に近い。19世紀後半から起こってきた造形の自律性を求めた印象派の活動は、三次元空間の平面化、色彩表現の鮮烈さへと造形芸術を導いていった。ノルデのこの作品には、それがある。原色と補色(緑)の強烈な色彩が、併置し、あるいは、重なるように配置された表現に、北方の神話的、秘儀的な精神性が示されているように、ノルデは考えていたのかも知れない。しかしそれが、ヒトラーの排斥するところでもあった。

この作品は、「退廃芸術展」で観客に大いに受けたようだ。ヒトラーの言辞の意味する嘲笑の対象ではなく、ドイツ国民の精神に何らかの共鳴を引き起こしたという意味において、受け入れられていたのではないだろうか。

ノルデはこの作品の返還を繰り返し要求していた。「退廃芸術展」から一年後の1938年7月2日の宣伝相ゲッベルスJoseph Goebbelsへ宛てた書簡で、ノルデの作品は作者のもとに返還されることになった。ゲッベルスはノルデの作品を好んでいたらしい。家に持ち帰って飾っていたということである。このままでは、ノルデの作品が廃棄される、とそのことをゲッベルスは怖れていたのではないだろうか。ナチスドイツの勃興期において、少しの作品でも、残る可能性があるのならば、それを願ってゲッベルスは返還の要求に応じたのではないだろうか。行方不明になっている作品もあり、正確には判らないのだが、このあと、4000から5000点ほどの退廃芸術家の作品が焼却処分にされている。



図3 失樂園  
106.5×157cm

ノルデの作品で、わたしが強烈な印象を受けた作品の一つに「失樂園」(図3)がある。蛇の巻きつく木(リンゴの木か?)を挟んで、右にイブEva、左にアダムAdamが座っている。アダムの後ろにはライオンらしき獣がいる。この題材も宗教画の定番の一つである。この図像も、わたしはいやになるほど見てきた。「キリスト磔刑」や「キリスト生誕」とともに最も多く取りあげられる題材である。その多くは、人類の最初の存在である両者が木を挟んで立っている図像をとっている。またイブは、ヴィーナスを模して、「美」の象徴のように描かれる場合がほとんどである。

それでは、ノルデのこのイブはどうであろうか。こんなにデップリしたイブを今まで見たことはなかった。二人が座っている構図も記憶にない。蛇はいるのだが、リンゴが見当たらない。リンゴを、この二人が食した直後の様子なのか。イブの姿勢は圧倒的である。髪の毛の色はブロンドだ。大きく見開いた目は何を見ているのであろう。いや、何も見ていない放心、法悦の状態にあるのか。すべての知覚が一挙に生起していく驚愕の表情なのか。口は腫れあがっていて、頬も赤みが差してきている。大きくなった乳首は、エクスタシーの情態で、もっと大きくなるのかも知れない。そして足は? アダムのそれと見比べればわかる、イブの足は蹠のように描かれているのである。これを、デフォルメした足である、とでも言えるのであろうか。

アダムとイブを分け隔てている蛇の巻きつく木にも目が行く。一応、この場面を、リンゴを食し終えた直後としてみよう。聖書に典拠はないのだが、リンゴは「エデンの園」においては「知恵の木の実」とされ、人間の「原罪」の象徴になっている。不死性を失い、つまり「命」を得て、認識する「人間」に変容する一瞬の姿勢を、このイブは示していると考えるのはどうであろう。そうならば、イブはどのような情動の状態に陥っているのであろうか。あまり見栄

えもしない隣にいる薄汚い存在に気がつき、性差を意識する直前の表情と形姿というように考えるのもおもしろいであろう。しかし、どうして髪の毛がブロンドなのか、どうして足が蹄のようでなければならないのか。現実的な形姿を移したとは思えないこの外見に、ノルデ自身は、「考えられうるもっとも自然なるもの」の表現としている。「自然なるもの」の表現、それは、「罪深いもの」の表現ということなのか。この絵では、人間の始原的、根源的な状況を強調するのに、もっとも強烈な肉のエロティズムが押し出されてきている。

しかし、このようなことをいかに穿鑿しても、甲斐がなさそうである。おそらく、このイブを愛おしく感じる男性は多いと思う。

今年(2015年)、ゼービュルで実物を見たとき、わたしは、目を大きく見開き、頬を膨らませながら、この絵の言葉にならない圧倒的な色調と形姿をただ見つめるばかりであった。

補足ではあるが、ノルデは1910年に「エデン」Edenという絵を描いており、アダムとイブを描いたのだが、アダムの部分をノルデは寸断した。今は、「太陽と幸福ときらびやかな花々」に囲まれた「イブ」という半分になった絵が残されている。イブは、痩せていて、足も細くて長い。赤毛であり、胸も薄い。着せ替え人形のような形象である。ノルデ自身、後悔したらしいのだが、どうしてアダムの部分を寸断したのであろう。

### III. フェリックス・ヌスバウム(1905～1944)

先述したように、ヌスバウムを知ったのは、1992年9月号の『芸術新潮』においてであった。それ以降、やはり『芸術新潮』においてであると思うが、「通りに立つジャキ」Jaqui auf der Straße(1944)という作品を見たように記憶している。「すばらしい場所」Der tolle Platz(1931)とか「死の勝利」も、どこかで見たような気がする。ヌスバウムについて、最近までそのぐらいの知識しかなかった。しかし、「ユダヤ人証明書を持つ自画像」を、ヌスバウムという名とともに忘れることはできなかった。特に、あの不敵にさえ思える目を。見返されているような錯覚を覚えた。

今年(2015年)9月にオスナブリュックのヌスバウム美術館Felix-Nussbaum-Hausに行った。旧市街のヘーガー門Heger Torの外側に、道路を挟んで立っている。ヌスバウム美術館は、市民たちの資金協力を得て、1998年にオープンしたコンクリートの建物である。外側からは傾いたように見える建物で、入口からして、その枠組がゆがんでいた。特徴のあるユニークすぎる建物である。入口を入ると、カタログや書籍が並んでいるコーナーになっており、カッセ(切符売り場)はその奥にあった。カタログなどを見ていると、ドイツ人の女性係員が「日本人か?」と聞き、「そうだ」というと、「日本語の良い本がある」と、大内田わこ著の『「ダビデの星」を拒んだ画家 フェリックス・ヌスバウム』を出して見せてくれた。「日本で注文する」と言って、この本とドイツ語で書かれた一番太い大きなカタログをメモした。„Felix Nussbaum, Verfemte Kunst Exilkunst Widerstandskunst“というカタログで、これと大内田さんの本を傍らに置いてこの文章を書いている。

展示室に続く廊下のドアを開けて、真っ直ぐに行くと突き当たり、それを左に行くと横の壁ガラスを透して、現代作家の作品がいくつか並んでいるのが見えた。それも突き当たり、確か左の方に行ったと思う。どうも見通しのきかない構造になっているらしい。

さて、ここで取りあげたいヌスバウムの作品はやはり、「ユダヤ人証明書を持つ自画像」である。

ヌスバウムは、1904年12月11日にオスナブリュックに生まれている。1922年にハンブルクの美術専門学校に移り、翌年ベルリンの美術学校で学ぶことになる。1932年にローマのヴィラ・マッシモにあるドイツアカデミーに留学した。翌年の1933年1月30日にヒトラーは政権を掌握したことで奨学金も打ち切られた。しかし、故郷ドイツに帰ることができず、亡命生活に入る。それ以後、ドイツに帰る機会を窺うが、二度と故郷の地を踏むことはなかった。大内田さんの著書によると、父親のフィリップPhilippは、オスナブリュックで金物屋として成功し、この町のユダヤ人社会でも一目おかれる存在であった。(26ページ)フィリップはドイツに対する強い愛国心の持ち主で、第一次大戦には、ドイツ軍の一員として参戦、一級鉄十字章を受けたことを生涯の誇りとして、その仲間たちでつくる「騎兵戦友会」にも属していた。(28ページ)父親は、ドイツのために戦ったドイツの英雄なのである。そのような父親のもと、ユダヤ教の戒律にも縛られることもなく、息子のフェリックスは裕福な家庭環境の中でのびのびと少年時代を過ごしていたようである。

しかし、ナチスの政権掌握後、第一次大戦でドイツ兵として参戦し、なおも祖国ドイツのために命を捧げる決意をしていた父親フィリップも「騎兵戦友会」から除名された。一度はスイスに亡命したが、望郷の念を断つことができず、ドイツに帰ってくるようになった。祖国ドイツがどうしてこのような仕打ちをするのか、父親フィリップは理解できなかったであろう。また出国することになる。

フェリックスは、生活の資を得ることもあり、亡命生活の間もずっと絵を描き続けた。亡命後の彼の作品は、強制送還され、殺されるかも知れぬ死の恐怖が、その根底にある。つまり、迫害される側からの作品である。11年に及ぶ亡命生活のことを考えると、そんな簡単な表現ではすまされない。祖国ドイツへのアンビヴァレントな感情が、ヌスバウムを精神的に消耗させていったことであろう。群像図には、自画像が挿入されている場合も多く、死の恐怖にとらわれている人物、狂気までに至らしめられて人物がうごめく。その中に、希望もない、光も見えない暗い表情の自画像がひそむ。ユダヤ人の運命ともに、ヌスバウムの感傷が表現されているように思えるし、それがわれわれ観る者に「民族」や「宗教」に問題を突きつける。絵を描くことがヌスバウムにとって抵抗することにもなっているのであろう。しかし、孤独な抵抗で、生きる希望さえ見いだせない。

「ユダヤ人証明書を持つ自画像」(図4)をみてみよう。

場所は特定される。カタログによると、1937年10月から1944年6月までの間、妻フェルカ(Felka Platek)と隠れるように暮らしたブリュッセルのアルシメード通り22番地(Rue



図4 ユダヤ人証明書を持つ自画像  
56×49cm

たヌスバウムの身分証明書が残っている。書式は自画像にあるものと同じだ。ある程度の自由は保証されていたかも知れないが、ナチスに占領された土地で「敵性外国人」として既に囚われの身であった。いつか収容所に送還されるのが定められていることの証明でもあった。この証明書はもちろん現実のものとは違う。この絵の証明書では、出生地と誕生日の欄が塗りつぶされている。国籍を示される欄も塗りつぶされて、赤い „JOIF-JOOD“ (ユダヤ人) というスタンプが捺されてある。絵からわたしには読み取れないのだが、„Allemande“ (ドイツ) とあるべきところが „sans“ (なし) と書き改められているらしい。国籍も、誕生日もない証明書である。写真を見ると現にこの証明書を持つ人間がそのまま描かれている。このような証明書に、帽子を被った写真を添付することなどない。「フェリックス・ヌスバウムというユダヤ人」だということだけの証明にすぎない。カタログの説明によると、「帽子」は「自由な人間の尊厳の印」ということである。自画像に帽子をかぶせ、帽子をかぶせた写真を証明書に描くこと、そこにヌスバウムはささやかな抵抗の意志を示しているのであろう。ヌスバウムが「ダビデの星」を付けたことは一度もなかったそうである。

壁の向こう側に枝の伐採された木と白い花の付いた枝が見える。この花のついた枝は枝が伐採された木のものではないであろう。壁で隠れて判らない。青空も見える。鳥が、いくつかの群れとなって、ちりじりに飛び去っていく。すぐに暗雲に蔽われるのか。建物の二階(日本では三階)の部分にだけ光があたって、明るくなっている。カーテンの掛かった窓の向こう側で、ヌスバウムたちは亡命生活を送っていた。それももう終わるのだろうか。

それにしても嫌な眼つきだ。逃げ場を失った人間の眼ではない。1944年6月20日の夜に、フェ

Archimède 22)の建物を後ろから見たところである。カーテンが掛かった窓のある住居が二人の生活をして部屋で、中庭には木が植えられて、電柱も立っていた。

この自画像の人物は、証明書を示している。それは、この証明書を見ている人間がいるということである。身分証明書を路上で提示を要求できる人間は、どのような輩であろう。また、その人物をヌスバウムはじっと見つめている。そして、その視線の先に私たちこの絵を見ている者が立っている。

また、身分証明書を見せているということは、合法的に滞在していることを示している。既にナチスドイツに占領されているベルギーでユダヤ人として滞在しているのである。ベルギー王国が発行し

リックス・ヌスバウムと妻のフェルカの二人は、ドイツ兵に捕らえられ、7月31日にアウシュヴィッツに移送された。それ以後の消息はわからないが、すぐに殺害されたようである。9月3日には、連合軍によってブルッセルは解放されている。

#### IV. おわりに

田野大輔著『魅惑する帝国 政治の美学化とナチズム』によると、宣伝相ゲッベルスは、ノルデやバルラッハErnst Barlachたちを「北方の表現主義」としてナチ芸術の中心に据えようと考えていた。(107ページ)「ゲルマン芸術」を標榜し、モダニズム芸術を断罪するローゼンベルク Alfred Rosenberg との文化政策上の対立が起こった。この権力闘争は、イデオロギーや組織の面においても深刻な亀裂を生じさせた。ヒトラーの仲裁を得て、一応収まったのだが、モダンアートを嫌悪し、「古代ギリシャ」を芸術の範とするヒトラーに、ゲッベルスもすり寄っていくことになったのであろう。

ヌスバウムも、ローマに留学した二ヶ月後、ベルリンのアトリエが火事になり、100枚以上の絵画を焼失している。親衛隊(SS)による放火であった、という証言もあり、ヌスバウムは、自らがナチの排斥の対象であることを強く感じるようになった。(大内田わこ、60～61ページ) この事件は、ヌスバウムに、自分の作品を後世に残すことを希求させる要因でもあった。

ノルデやヌスバウムのことを考えると、「祖国とはなにか?」という問いが突きつけられる。さらに、「民族とは?」「人種、血統とは?」「宗教とは?」と、次々に問いかけてくる。これらは、それぞれの個人のイデンティテート(Identität)を同定する問いかけでもある。それに答えを出す必要もあろう、しかし、そのことになんの意味があるのだろうか。その答えは、時にして、人間同士を分断して敵対させ、他の人々をひとからげにして、いわれのない憎悪の対象にしてしまう。恐ろしいことである。21世紀に生きている現在の人類にも、このことはあてはまるようだ。

ゼービュルのノルデ美術館に行ったのは2015年9月2日で、ヌスバウム美術館に行ったのは9月5日であった。7月末ぐらいから、シリア難民を中心にEUに入ってドイツを目指す難民の数は昨年、100万人を超えた。9月4日に、オスナブリュックの旧市街に入る手前の道路で、難民受け入れ反対のデモに出会った。200人以上の市民が参加していた。ドイツ人ばかりでもなさそうであった。受け入れ容認を表明したメルケル首相も似顔絵で登場している。生活手段も持たず、生活の目処も立たないままに流入する難民は、貧困さゆえに犯罪に走ることも多い。治安悪化を招くことも必定である。祖国は、シリアは、既に国家として崩壊しているのであろう。

恐ろしいのは、「アラブ」とか「イスラム」とか、全称的な言葉で誹謗中傷し、攻撃を加えていくことである。個々の人間を見極めることもなく、決まり文句で人間を集団的に貶めることが、どのような結果を生むことになるのか、歴史は既に私たちに教えている。

(2016・1・11)

## [参考文献]

- ・芸術新潮 1992年9月号 ナチスが捺した退廃芸術の烙印
- ・芸術新潮 2005年8月号 ドイツの歎び 美術でめぐる、とっておきの旅ガイド
- ・芸術新潮 2015年8月号 史上最強の宗教画はこれだ 謎の巨匠グリューネヴァルト
- ・西洋美術研究 2013年No.17 特集 記憶と忘却、三元社
- ・EMIL NOLDE RETROSPEKTIVE: (hrsg. v. Felix Krämer), Prestel Verlag, 2014.
- ・Morgensonnenland. Emil Nolde in Japan: Kabinettausstellung, Nolde Museum Seebüll, 2005.
- ・三浦篤 『まなざしのレッスン② 西洋近現代絵画』、東京大学出版会、2015.
- ・田野大輔 『魅惑する帝国 政治の美学化とナチズム』、名古屋大学出版会、2007.
- ・大内田わか 『「ダビデの星」を拒んだ画家 フェリックス・ヌスbaum』、光陽出版社、2010.
- ・Felix Nussbaum Verfemte Kunst Exilkunst Widerstandskunst: (hrsg. v. Felix-Nussbaumgesellschaft e.V.), 4Auffl., Rasch Verlag, Bramsche, 2007.
- ・『コラージュ 1914-1918 第一次世界大戦犠牲者へのレクイエム「二度と戦争をしてはならない」』 Ginoza Village Cultural Center GARAMANHALL, 2014.